

日本におけるティーンコート導入の検討

220819 多田圭汰

目次

1	はじめに	1
2	ティーンコートとは	2
	ティーンコートの利点（メリット）	2
	ティーンコートの問題点（デメリット）	2
3	日本への導入の検討	3
	（1）再犯率との関係	3
	（2）処分の判断の妥当性	4
	（3）文化的背景の違い	4
4	結論	5

1 はじめに

私は、少年法ゼミナールに所属し、数ある刑法犯の中でも、特に少年犯罪について詳しく見ることが多い。その中で常に気になることといえば、事実として、現行の少年法は、少年の健全育成、再非行防止に貢献できているのだろうか、ということである。令和5年版犯罪白書『少年の刑法犯 検挙人員中の再非行の人員 再非行少年率の推移』¹によると、平成15年から少年の刑法犯の検挙人員は減少の傾向にあるのだが、そのうちの再非行少年については、検挙人員の減少率ほど大きく減っているわけではない。再非行少年率でみれば、平成27年までは若干の増加傾向にあり、そこから令和4年にかけては減少傾向ではあるが、31.7%再非行率という結果になっている。減少しているとは言え、3人に1人以上の非行少年が、少年に対する特別な処遇を受けた後で、もう一度非行を行っているのである。また、インターネットが急速に普及し、未成年でもスマートフォンを持ち、SNSを利用することが当たり前となっている現代においては、インターネットの持つ匿名性などにより、非行に関わる事案が正確には認知できない現状もある。非行の検挙件数という表向きの数字には出てこない、新たな少年犯罪や非行も実際はかなり増えていると思われる。

そんな中、私は前期のゼミナールで初めて「ティーンコート」を知った。少年法は年々改正されているとは言え、その処遇の内容や手続きについては大きく改正されていない。ティーンコートは、少年法制において新たな風となり、再非行率、ひいては少年犯罪・非行を減少させる可能性を持っているのではないかと私は感じた。

¹ 法務総合研究所（2023年）令和5年版犯罪白書 273項

本稿では、そのティーンコートの可能性について検討しながら、日本の新たな少年法制として組み込むことは妥当であるのか、探ってみることにしたい。

2 ティーンコートとは

少年法廷と呼ばれるティーンコートは、1983年にアメリカ合衆国テキサス州オデッサ市においてはじめて創設された。非行を犯した少年の処分を、同世代の少年が運営する審判によって、少年たちの話し合いによって決定するものである。そこで下される処分は、成人の刑事処分とは違い、ボランティア活動などの奉仕活動や、被害者への損害賠償など、少年の社会的な信用を取り戻すことを主な目的としたものが多い。

以下では、ティーンコートについて、そのメリットとデメリットに分けて説明する。

ティーンコートの利点（メリット）

ティーンコートの利点の最も大きなものは、その教育的効果の高さであろう。被告となった少年は、対抗心のある大人から審判を下されるよりも、同世代からの審判は、精神的な不安感が軽くなると思われる。結果として、アメリカで行われたティーンコートにより審判を下された少年の再犯率は、40%も減少したというデータもある。またその教育的効果は、被告となる少年だけではなく、実際に審決や弁護を行う少年たちにまで及ぶ。成人が行う裁判と同様の形式で行われるティーンコートは、裁判という制度そのものの理解だけでなく、ティーンコートを実施する前に行われる事前研修などを通じて、法律などの理解を深めることができる。その法教育的な側面は、法への理解、関心を高めるだけでなく、少年たちの将来的な犯罪予防にもつながるのである。

さらに、奉仕活動を刑罰の代わりとすることで、罪を犯した少年たちが、社会への理解を深める、あるいは「自らの行為が地域社会や被害者にどのような損害を与えたのか」をしっかりと認識させることができ、少年の更生の大きな手助けになることも間違いない。

ティーンコートの問題点（デメリット）

一方で問題点、懸念点も挙げられる。最も大きなものは、少年たちが審判を下すことによる、公正性や正当性への不安である。同年代の少年たちと共に、大人もサポートとして参加するのだが、やはり成人していない子供によって処遇が決められてしまうことは、感情的な判断に任されやすくなってしまう。法律的判断や、適性手続への理解が不十分なままに処遇を決定することは、非行を犯した少年自身にとっても、不安が残るものとなる。さらに、身体的拘束を伴うものでない処遇になったとき（前述の奉仕活動など）、これが本格的な社会復帰支援となるとは言い難いのも現実である。そこに「甘える」少年は必ず出てきてしまい、再非行の原因となってしまう元も子もない。

また、非行少年自身の心理的な負担や、現代においてはプライバシーの問題も絡んでくる。ティーンコートでは、非行少年は同年代の少年たちの前で自らの罪を語らなければな

らない。「見せしめ」的な雰囲気や、同調圧力による非行少年の心理的負担の問題は、目を背けられない。また、ティーンコートに参加した少年たちによるSNSでの情報漏えいの可能性など、対象が少年であるゆえ、与えてしまったショックは取り返しのつかないことになることもある。

3 日本への導入の検討

ここまでティーンコートについて、メリットやデメリットを挙げて説明してきたが、実際に日本に導入することは可能なのか、導入するならばどのような点に配慮すべきなのか、以下3つの観点から検討していきたい。

(1) 再犯率との関係

実際に導入するにあたっては、ある程度の効果が認められるものでなければならない。ティーンコートを導入することによって、再犯率を下げるのが可能なのか、検討していく。1979年、アメリカ合衆国コロラド州において、ティーンコートの原型となるディヴァージョンプログラムが行われた。それは、被疑者が有罪の答弁をし、さらに被害者に損害賠償をすること、社会奉仕に従事すること、あるいは親とともにカウンセリングを受けることに合意する契約書に署名しなければならないとされた。その後同年代の陪審員によって処分決定の審判が行われて、選択された処分に従事することになる²。その結果、そのプログラムの非参加者の再犯率が55%~65%であったのに対し、参加者は15%以下という結果になった。

同じくアメリカ合衆国、カリフォルニア州アラメダで行われるティーンコートは、同世代の少年たちによる処分決定権が認められており、法的な拘束力のあるものである。カリフォルニア州福祉と施設に関する法律では、「保護観察官は、少年を少年裁判所に送致する代わりに、本人と保護者の同意を得て6か月を超えない範囲で、少年が少年裁判所の管轄に入るような状況を正すために、監督に関する特別なプログラムを考慮することができる」とし、保護観察の一環として、ティーンコートというプログラムを選択できるようになっている。こちらでもまた、少年法廷プログラムを選択した少年の再犯率は10%、選択しなかった少年たちの再犯率は30%を超えるなど、再犯率という数字だけで見れば、効果は大きいようだ。

しかしながら、これらのデータにおいて、ティーンコート制度は罪を犯した少年本人が自ら選択をしている。つまり、自らティーンコートによって裁かれることを選んでいるということは、その効果についてある程度の理解はあり、再犯率が下がることは当然なのではないか、ということである。

よって、現実的にティーンコートを導入するならば、自らの処遇について、罪を犯した

² 山口直也「アメリカ少年司法における”ティーンコート (Teen Court)”」『犯罪社会学研究 第19号 1994』(現代人文社、1994年、96項)

少年本人がそれを制度の一つとして「選択できる」ようにすれば、その効果を大いに発揮し、結果的に再非行率の低下をもたらすことができるのではないかと思う。

（２）処分の判断の妥当性

ティーンコートについて議論されるものの中で、多く挙げられるのは、「十代の少年が決定権を持って、罪を犯した少年に対して、妥当な処分を下すことはできるのか」というものである。法律に関する知識や社会的な知識が薄いまま、感情的な判断に任せてしまう恐れもある。また前述にもある通り、ティーンコートが下す処分は、社会奉仕活動など、身体的拘束を伴うものではないため、軽すぎる処分を下すと、かえって再非行をまねくリスクもある。

そこで、現実的にティーンコートを導入する場合は、その適用を「初犯の軽犯罪を犯した少年に限る」ことにすべきである。アメリカ合衆国で行われてきたティーンコートは、軽微な罪を犯した少年に限られている。当然ではあるが、軽微な罪を犯した少年は、まだ十分に更生の余地があり、被害者との関係の修復、社会復帰に繋がりやすい。それも「初犯の少年に限る」点で、さらにその効果を大きくするのだ。

日本で平成 17 年から行われている「少年対話会」は、軽微な犯罪を対象とした実践のひとつである。非行少年の再犯防止と被害者への支援を目的に、窃盗、建造物侵入、占有離脱物横領などによる非行少年を対象として、事件の送致前に警察がコーディネーター役を務めて、非行少年と保護者、被害者、関係者の参加のもとで対話の機会を提供するものである。少年対話会後のアンケートでは、被害者との対話により、「迷惑をかけた」「被害者に謝りたい」「責任を感じた」「被害の大きさは自分の想像以上」と感じた少年は 95% を超え、また全体の 85% が参加に満足していた³、というデータもある。軽微な罪を犯した初犯の少年であれば、その責任や、被害の重さを、ティーンコートで行われる被害者との対面や、同世代の少年たちが考えて下す処分で、十分に更生の可能性があり、再非行や重大非行に走ってしまう少年の芽を摘むことができると考えられる。

ティーンコートの適用を「初犯の軽微な罪を犯した少年」に限ることで、処分の妥当性を欠くことをある程度避けることができ、現実的に導入となれば、再非行や重大非行に走る少年を減らすことができると考える。

（３）文化的背景の違い

ここまで、再犯率や処分など、法律的な観点から見てきたが、最後に文化的な背景から、ティーンコートを見ていきたいと思う。

上記（１）、（２）において、ティーンコートの効果の高さや、実用的な部分を紹介、検証してきたのだが、こんなにも高い効果が認められているのに、なぜもっと早く日本に広まらなかったのだろうか、その理由の一つに、欧米と日本の間に大きな文化、考え方の違

³ 石橋昭良「ティーンコート ―非行臨床からの検討―」『人間科学研究 第 33 号』（文教大学人間科学部、2011 年、149 項）

いがあるからではないかと私は考える。

それはつまり、日本より欧米のほうが、ティーンコートという制度を理解し、受け入れられやすいのではないか、という考えである。

欧米のキリスト教的な価値観においては、「罪を犯しても、真の反省と奉仕によって赦される」という考え方が、宗教的にも文化的にも根付いている。一方で日本は因果応報、正義感からくる、「悪いことをしたら恥ずかしい」「罰を受けるべき」「周りからの視線」などの考え方が根強く残っていると思う。

このような概念を、アメリカの文化人類学者、ルース・ベネディクトは著書「菊と刀⁴」で日本文化を「恥の文化」、欧米文化を「罪の文化」と提示した。「恥の文化」とは、他律的であり、恥をかくことを極度に恐れるもので、人の目や社会的な非難を特に気にする。世間から嘲笑されることを避けるために、行動を律し、徳を積み、名誉を重んじるものとした。「罪の文化」とは、自律的であり、「罪」の意識により行動を律し、善行を行うもので、神の戒律や絶対的な良心を基準に主体的に行動をするものであるとした。

このような「罪と恥」の文化をティーンコートに当てはめてみれば、罪を認め、罪を犯した少年の気持ちを汲み取り、同世代の少年たちが処分を決めるうえ、身体的な拘束を伴わず、奉仕活動などの軽めの処分を下されることは、欧米の「赦し」とよく合い、犯した罪のぶん、反省をして社会的な信用を取り戻すことは、欧米において認められやすいのかもしれない。一方で日本の「恥の文化」においては、犯した過ちによって社会的な信用を大きく失い、それを簡単に許すことは難しい。またその「恥」は少年の両親や、親族にも及ぶものとなり、地域社会などの信用を取り戻すのは難しいのではないだろうか。そのうえ正義感、厳格さから、「子供が裁く」「奉仕活動が償い」となることは、被害者や地域社会の理解を得ることも難しくなりうる。ティーンコートという制度そのものが、日本の文化的な背景と、あまり合うものではないのかもしれない。

では、ティーンコートは完全に日本に受け入れられないものなのか。ティーンコートの効果を日本で発揮させることができるとしたら、それはやはり「軽犯罪のみにティーンコートを適用する」というようにすべきなのではないかと思う。「恥」は罪が重くなればなるほど、大きくなるものである。(2)でも述べたように、ティーンコートの適用は「軽犯罪に限る」ことで、期待される効果を得ることは日本でも可能であると考え。そこには少年のプライバシーを保護する徹底した仕組みと、奉仕活動等の軽めの処分であっても、少年が反省し、更生することができる正しい処分の決定を、大人が手助けをしなければならない。「恥」の考え方は徐々に薄まってきているかもしれないが、日本人の根底に強く残っているものである。現実的にティーンコートを導入するとなれば、しっかりとした整備が必要になりそうだ。

4 結論

⁴ ルース・ベネディクト『菊と刀 日本文化の型』（講談社学術文庫、2005年）

結論として、日本にティーンコートを導入すれば、再犯防止や社会復帰に貢献することができると思われるが、その効果を発揮するためには、ティーンコート対象とする少年は「初犯の軽犯罪を犯した少年」に限り、制度の一つとしてティーンコートを選択できるようにすべきであると思う。さらに、欧米との文化的な背景の違いから、ティーンコートについて受け入れられにくい現実があると思われるので、少年のプライバシーを守るための法整備や、下される処分が妥当なものとなるように、大人がサポートする体制を整えるべきである。

日本の新たな少年法制として、ティーンコートは有用なものであると思う。少年犯罪の再犯率に大きな変化がない今、革新的なティーンコートは、少年法制に新たな「風」を吹き込むことができ、再非行を減らし、少年犯罪・非行を減らすことも可能になるのではないか。